

Battles in W.W.II

第9回 独裁者ヒトラー・ベルリンに消ゆ

杉浦 康

✦ヒトラー最後の晩餐

1945年4月20日、アドルフ・ヒトラーはベルリンの総統地下壕で56歳の誕生日を祝った。SS長官ヒムラー、空軍元帥ゲーリング、外務大臣リッペントロップ、軍需大臣シュベアー、海軍元帥デーニッツ、宣伝大臣ゲッベルス、カイテル、ヨードル元帥など第3帝国の高官が顔を並べた最後の機会であった。

総統地下壕は、ベルリンの中心部ブランデンブルク門に程近い、ヘルマン・ゲーリング通りとヴィルヘルム通りに挟まれた区画内にある総統官邸(新官邸を含む)の地下に、コの字型に構築されたものだった。

大地下壕は、副官や陸、海、空軍連絡将校たちの待機所、ヒトラーの書斎、病院設備、ガレージ、

護衛兵士用防空壕、食堂、ヒトラーの執務室(自殺した場所)、浴室、会議室、ヒトラー接見室、エヴァ・ブラウンの寝室、電気などの動力室、応接間、大会議室、電話オペレーターと無線設備、空気清浄装置、冷蔵庫と食糧貯蔵庫、調理室などからなっており、外務省や宣伝省にも地下通路で結ばれていた。

地下壕の防護は、天井部盛土の部分で2m、その下は3~4m厚のコンクリートが打たれていた。これに守られた居住区画は地下1階と2階に分かれており、ヒトラーの壕は地下2階部分となっていた。

赤軍はヒトラーの“誕生祝い”に、ベルリンの中心部めがけて大口径砲による砲撃を浴びせて、ヒトラーを驚かせた。

✦迫りくる赤い嵐

4月21日、赤軍第2親衛戦車軍は早くもベルリンの北方50キロに迫った。さらに、ベルリン郊外ミッゲル湖北方には第1、第8親衛戦車軍が迫り、また、第3親衛戦車軍はベルリンの南7キロに達しベルリンの包囲網を狭めていた。この絶望的な状況下、ドイツ帝国の高官たちは続々とベルリンを脱出していった。

4月22日、赤軍戦車部隊の先鋒がハーフェル川に達した。この時には、総統官邸の地上部分は、砲撃と爆撃のためにすでに廃墟となっていた。ベルリンの南北から赤軍は猛烈な砲撃を加え、市街外郭防御線を突破し市中心部を目指していた。

4月23日、ポツダムとテンペルホフ飛行場にソ連戦車が姿を見

せ、ベルリンは完全に包囲されつつあった。ヒトラーは、ヘルムート・ヴァイトリング將軍をベルリン最後の防衛司令官に任命した。しかし、指揮下の第56戦車軍団などは名ばかりの戦車軍団で、実態は消耗し尽くした師団の集まりでしかなく、戦力と呼ぶにはほど遠かった。

総統護衛隊は「SS モーネケ戦闘団」と呼ばれたが、ヒトラーの随員で構成されており戦闘力はほとんど無かった。ベルリン防衛の実質は、パンツァーファウストを携えた国民突撃隊が主力だったのである。

4月24日、4個戦車軍を含む8個軍がベルリンを攻め、国民突撃隊やヒトラー・ユーゲントの少年が勇敢に防衛戦を行う。この日、



(上) 1945年4月初旬、ドイツの首都ベルリンの防衛戦で戦う、SSヒトラー・ユーゲントの少年隊員20名に鉄十字章を授与するヒトラーで、総統官邸地下壕付近で撮影された最後の公式写真である。

(下) ベルリンのシンボルと見られていた帝国国会議事堂。1945年4月27日、ヒトラーの自殺する3日前に、激戦の後、赤軍の手に落ちた。写真で見ると、ボロボロとなった状態から銃砲撃の凄まじさがよく分かる。(編注：手前のB4改造自走砲については、別冊S&D「対戦車自走砲」にも写真あり)



ヒトラーは、権限委譲を打診してきた空軍元帥ゲーリング、コラー空軍大將を裏切りの罪で SS 部隊に逮捕させた。この日、ジューコフとコーニエフの軍は手を握り、包囲の輪が閉じたベルリンからの脱出は不可能となったのである。

4 月 25 日、ついにベルリンの南 100 キロのエルベ川のトレガウで、アメリカ第 1 軍とソ連第 5 親衛軍が手を結び、ドイツは二つに分断された。ベルリンの戦いはついにシャルロッテンブルクにおよび、SS「ノルトランド」、SS「ダンマルク」、SS「ノルゲ」の親独外国

人師団の残存部隊が、必死の戦闘を繰り広げていた。

十神々の黄昏

4 月 26 日、この日をもってヒトラーと国防軍総司令部との連絡は途絶えた。ドイツ第 12 軍、第 41 戦車軍団、第 20 軍団などによるベルリン救援作戦も失敗に終わった。市内では狂信的な SS 幹部が、即決軍事裁判により多くの人々を射殺していた。

4 月 27 日、多数の部隊で逃亡が始まり組織的な防衛、救援作戦は行えなくなった。すでに赤軍はベルリンの中核である官庁街に達し、ドイツ第 3 帝国のシンボルだった国会議事堂を巡る攻防が続いていた。

4 月 28 日、総統地下壕付近にも爆弾や砲弾が

落下し、外との連絡は完全に途絶していた。ディーゼル・エンジンによる強制排気装置がうなりを上げる中で、ヒトラーはベルリンにとどまる決心をした。その頃には、赤軍はベルリンに早くも軍政部を設置し一般住民に布告



を発していた。この日、SS 長官ヒムラーの英、米との降伏交渉がヒトラーに発覚している。

4月29日、ヒトラーはデーニ

ッツ海軍元帥を後継者に任命し、エヴァ・ブラウンと結婚式をあげた。ベルリンに向かう救援軍は全て赤軍に阻まれ救援は不可能となった。

4月30日の正午ごろ、赤軍はとうとうティアガルテンの総統官邸付近に現れた。前日、ヒトラーは公的と私的の二種類の遺書を残し、もはやドイツ第3帝国は存在しないのに、自分亡きあとの新内閣まで決めてい

た。すなわち、大統領デーニッツ、首相ゲッベルスなど19人の名を挙げたのである。

午後3時30分ごろ、ヒトラーは自室で自らワルサー・ピストルで頭部を撃ち、妻エヴァもまた青酸カリ自殺をした。遺体は軍用毛布に包まれ地下壕から3~4mの所の砲弾口に運ばれ、ガソリンをかけて火葬に付された。しかし、2人の遺体は後に赤軍が発掘してベルリン近郊のプフウで解剖され確認されたといわれている。

激戦の後、無残な姿をさらすベルリンの中心部ブランデンブルク門前を行く、当時の赤軍最新鋭だったスターリン戦車 JS-2 1944 年型。ヨシフ・スターリン II 重戦車は 122 mm 砲を搭載したドイツ重戦車キラーだった。







(左ページ上) ベルリン市街を行く赤軍親衛戦車軍のT-34戦車。ベルリン攻撃には4個戦車軍と4個打撃軍の合計8個軍が、東西南北から包囲した。この強大な兵力のため、外部からの救援軍はベルリンに到達することは出来なかった。

(左ページ下) ベルリン市街を掃討する赤軍部隊。赤軍はベルリン包囲戦に第1、第2、第3、第8親衛戦車軍を投入した。T-34戦車を中心として戦車の総数は約800両だった。写真後方はSU-100自走砲である。

(上) ベルリンの官庁街の空撮写真だが、中央が総統官邸で、この下に地下2階の巨大な総統地下壕があり、上方はティアガルテンである。地下壕は表土2～3m、コンクリート天井厚3～4mだった。

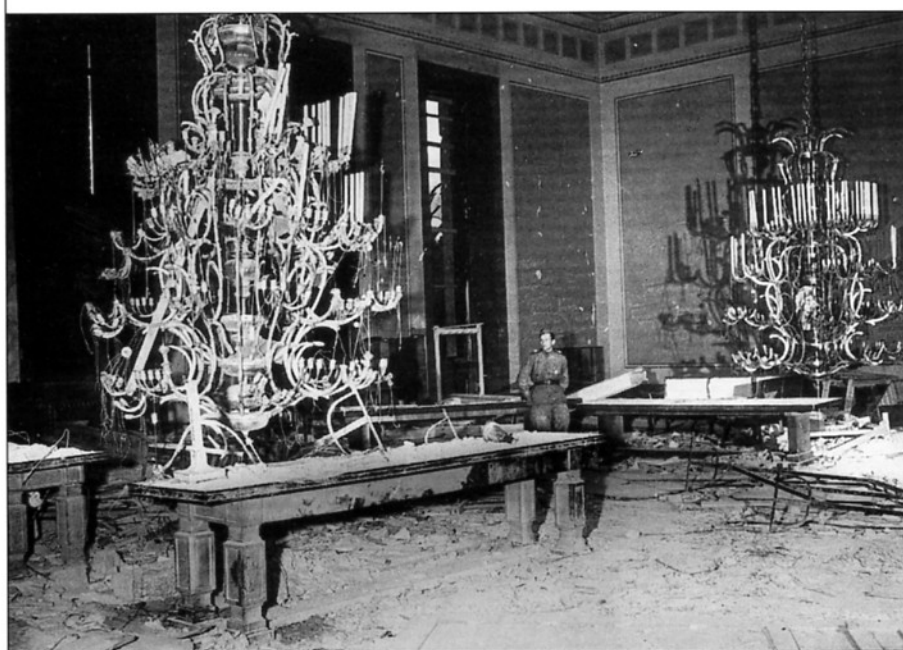
(中) ヒトラーの総統官邸「栄誉の庭」であるが、この後方に新総統官邸があった。写真の右下あたりがヒトラーの地下壕で、自殺した居室があった。また、総統護衛用の第一次大戦頃の旧式装甲車も見える。

(下) 新総統官邸の謁見の間に向かう長い通路である。このあたりの地下壕は、病院設備とヒトラーの書斎などがあった。米軍兵士と赤軍兵士が仲良く見学している。





新大統領官邸内のヒトラーの執務室と巨大な大理石の執務机を見る、米軍将校と赤軍将校。このデスクでヒトラーは世界制覇の夢を追ったのであろう。



ヒトラーが賓客を迎えた大統領官邸接見の間だが、左右に大きなシャンデリアが降ろされている。多数の第3帝国の要人がここでヒトラーに会った場所である。



地下壕のヒトラーの寝室だが、証拠書類を捜すため巨大な金庫がバーナーで焼き切られている。壁の向側はヒトラーの居室で、さらに奥は浴室になっていた。



(上) ヒトラーが自殺したといわれる地下壕の居室だが、壕にはすでに水が侵入している。ヒトラーが自殺したのは1945年4月30日午後3時30分ころだった。

(中) 大統領官邸の裏手にあたる場所で、ヒトラーの死体は左手の建物から運ばれ、中央の穴でガソリンをかけて焼かれたという。穴の脇にはそのガソリン缶が転がっている。死体はその後、赤軍が掘り出してベルリン近郊プフウに運び、解剖したといわれている。右手は換気用のダクト。



(下) ベルリンの中心部、ティアガルテンに造られた赤軍戦勝記念碑だが、T-34戦車が誇らしげに置かれている。また、向う側には廃墟となった帝国国会議事堂が見える。「国会炎上事件」はナチス興隆のきっかけとなっただけに、この議事堂は第3帝国の盛衰を見守ったことになる。

